

2

9

8

7

6

5

4

3

2

1

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

0

•

JAPAN

Takuma



2913
5

特

昭和九年
七月六日
購入

貞操婦女八賢誌二編中

相田

東都 狂訓亭主人編次

號神女真弓弘占ト

告昇天富藏催神祭

第九回

清少納言の枕双扇とひふの書るるいともりととき賢婦うるる義事
のよの所の始ふ孝ひる人の子と書ひそむ人の道多くわづ中に親子
孝ある如きを第一の所萬よきん君す憲政呈一友がちよ信ゆるもの皆先
孝成元とく其かよりかとおもとさまが君あれ元とほもし奉立く道事
孝弟へ仁とくこあひの本と論語みちあすまこと方実多様の梅李新観

まわる御身を他人の体あくお襟が恋情の癡るともうやあまを
云ひてはと一公事の申たまども別に云ふ事く近切うつよお裡をね
と返事とて御身へうかうかアイダモアト影をゆけ恨りげと拂を御の御
きまゆく喘息をほゞぐちりのよせびとめう情人の密徳才智の
あゝかと我之情ぬ眞親の奸計をと視察一お尋ねとあく
死世の人のがぶねあらへ無養は達かと親をもとと男の持る龍山を奪は
とあとの身をもと親の御の一同かみとおうへ形致すとと惜れも
おも大義量から人ふをオハ倚せく事とよがまとくと朝夕和合恩
おも金が手く美徳着ば錦が裏す看どともあままの脩業も御の麻
毛と粧身一やまやな養父の所用たつてくらう筋とドと固くと
いふてのむとわきんを鶴ひきまつ縫ぬ縫とお徳す縫しとを
ひドとひく拘ふ公傳のとくと縫の美少はすがりうるき
と志縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のと
はりあらまとてきらかうと縫のとくと縫のとくと縫のと
縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のとくと
あわだらまと縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のとくと
あわだらまと縫のとくと縫のとくと縫のとくと縫のとくと



助らんと願ふことを要通の事より自化平等の法縪となりふりん
神國の神の神あれありあらむ間があら神山とあるくら山芦奈の
中湖を委土とす守護百人神多々あまびとづきのまろを下る
勿解の事にて御本寺をめぐらせば富翁小財とすげく附れ拜の靈助と
御りどそらの陰陽の子神と崇佐三社の祀宣四則の神の教示感化の
靈應を率り瑞荷五社の神通を仰ぎ府中の六所と号とて七世の子孫
安寧の廣徳とのまこと御年との歲神を數ひてハ精神盡の利益を
蒙り厄年つとも平安をもん九天端神十方諸神の神と廉黙少き
也且まく神を祀るゝ先氏神と雖モ一切の如くおねる附へ四海に在
諸天岳神佐をもぐりてすかさずをすとくや夫神
乃の教ふ及ぞ清心と里進て利益と御り素戔入ハ獨徳自在の眞助後より
よしの聲をも能ひず一帳ぐ崇敬ゆき下とりとち声産み荒ぶせがえ來當
社の神縛りよりよう頃久今まこと真らう神靈の冥た死する形勢をも
嚴重に看せつうけまき遊の通信男女泉奈よれ念へ六根清淨と
すく松(南岳)と一聲いひひく阿弥陀佛死にゆく中尼松ゆきのも多く
ゆく衆千貫の銭材をもあ同一樹下樹てうけの筋真らうハ松やうん一際
有るく頗つ阿波の鳴戸はなまます湯玉の響き震雷も及ぶ古釜の
熱湯を白眼づきすうりへ岩戸に近寄るア禪の跡もかくやと覺ゆ

おとしをひりて、宮奴二人ハ被城殿と稱不まひ繩るくくび紫度り
かの姫又足利と宮奴二人ハ被城殿と稱不まひ繩るくくび紫度り
やんやうじろをく、をくらをとくらとくらとくら
本社の後赤壁とある林の中へ走運びる折節は如く家監軍力不足りと
見ゆる女もとをまきと形勢うるが二八をうりの宮奥トヨヒ赤通女に手拭
見るる女もとをまきと形勢うるが二八をうりの宮奥トヨヒ赤通女に手拭
を塵にまきと小きとちるきとゆきとゆきと御社よりあり拜殿の宇よ
坪ひまきと邊の縁と物格まに縁ひ止まと石垣をまく下りて河邊東改
大梵天よりと頭をひく一個の乙女近き御御體様よりとあゆくとあゆくの能
上り引ト一吹きあわせ林の方より奴の宮奴二人ハ赤通女の右袂う
信みち ひきとめ ひきとめ ひきとめ ひきとめ ひきとめ ひきとめ ひきとめ
かの道まくテスの元へまんまとそ尾と鎌倉への軍用金とコリヤニイ
ト向ひ赤刀をまく斜ト仙女直弓と後名一墨絵とまくとを今日是今か
よととあひひと女の仇うる合戻れ袖らふと付て落がまく裏をうきぬ工事
に詰めのちそぞり詰め財をあらひと封「宮室お金錢額うるをこす
よとと紫の縁食「サア立入とと易くとあるの第臣田持貢の合答お仕
事くありとて丈丈とよ近傍をき官船家「左船をぶ今事をくほ
りるをゆ待あく、真一イエー一時刻を延ばすも何時が便宜とひでも良書ひ
てまたりつけ一ト品ト情中よりうきの幕とおり宮「をとと用ひくのひ萬よ
久と國をくまくがるあらひとの難世行おままである蜀紅の錦の切と
あらひの「うきとまくがるあらひとの難世行おままである蜀紅の錦の切と
いりきとまく真一イエー一不思議と縁の難世行おままである蜀紅の錦の切と

ト
兵の司とせらも御教書（シテ）をまくとあらざる渾（ツル）身（スル）をす方氣（カクシ）すれど
やよ
或歎（アハ）のてあくまで上野松井田の原中（シナ）まくとまくともかくご捨ひぬ而（ヒテ）
き
あくとく看（シテ）み由来（ヨリハ）紀は更書（モロコシ）不長尾景春と仰（アキラメ）て豊後（ヒタチ）のま勢を
象（シマセ）
長尾（ナガオ）より逐進（スルシニ）ゆると推量（スルシニ）すとまほもまほと合谷の仇（アヘ）とある族（シテ）とも思ふ
わりとまのと不帰（シカシ）の備來（ビラメ）こまく然（タタ）めの益（ヨリ）とあり官領（カントウ）を逐付（スルシニ）よが西
方侵（アヘ）をすく物詔（ムカシナシ）しんあの方（ミソチ）日中的供物（カミナリ）と神酒（カミヌシ）頂戴（テイジテ）へとまく
兩個（ツコト）うちの勅（テレ）貴嬪（カミナリ）あくまきもが勞（ラウ）生供物（カミナリ）も神一酒（カミヌシ）も林の中假屋（カミナリ）の
内（ナカニ）下（シテ）西（シテ）ま（マサニ）と酒（スル）の呪（シテ）する生君（シテ）姫（ヒメ）あらわりての火焚（カミナリ）風（カミナリ）まづぐ富士（ヒタチ）の山
とまく深（シテ）いきわざを教（シテ）もあくじまく（マサニ）あまくと追（スル）入（スル）ハ林底（カミナリ）きくゆ

第十回 尤女記憶辨蜀江錦
赴神事毒婦計乙女

まも蜀江錦（シテ）とえ元蜀江（シテ）の文字（シテ）紅（シテ）と青（シテ）非（シテ）うとを今（シテ）や蜀を
さよ
除（シテ）君（シテ）の子は國（シテ）に方（シテ）に大河（シテ）あり岷川（シテ）沱川（シテ）黑川（シテ）白川（シテ）の宣（シテ）きりとまの蜀の
アホ（シテ）をとねる（シテ）わらう（シテ）あらう（シテ）草あ（シテ）さ（シテ）あく
錦（シテ）織（シテ）糸練（シテ）す織（シテ）又（シテ）河（シテ）の清水（シテ）に酒（シテ）精製（シテ）庄（シテ）と数百遍（シテ）員（シテ）とまひを
續（シテ）魚絲（シテ）ことと光（シテ）女裝（シテ）からく鐵鑿（シテ）は縫（シテ）がくからうて六金光室（シテ）よ満（シテ）
ととととと被（シテ）河（シテ）の室水（シテ）にむかへ酒（シテ）せるゆあうとを實（シテ）す希代（シテ）の錦（シテ）ゆり故
わる蜀（シテ）と國号（シテ）せ一財（シテ）のりう（シテ）古（シテ）きとまう（シテ）今（シテ）の南寧（シテ）安^{（シテ）}美（シテ）の國（シテ）と称（シテ）
ええざ（シテ）とひよ（シテ）まきん（シテ）が（シテ）宗（シテ）まきう（シテ）まく（シテ）こまく（シテ）ひがしてのくわお
永盛（シテ）と申（シテ）うの河南（シテ）を織（シテ）の國（シテ）と称（シテ）曹操（シテ）が^{（シテ）}曹丕文帝（シテ）と位（シテ）

今の大川を蜀と名づく劉備玄德が興烈皇帝と称せらるゝ彼地に
時代は盛に織殿繁が昌せりと云ふ神仙傳が載せらるゝ左義が元放
擲明神異の術と蜀の薦と云ひ傳小曹操並く蜀の佛と云
左慈ニ端と異端と云傳によると模倣の盡極が大活の生徒多く之
修ふ一反のて成りたば其財代多寡不常めびく價も貴直めとれもか
又如年廢私義と云ふ二國の呂六年西晉東晉の代十五年
百五十六年宋の代七至六十年南齊の代五至三十年梁の代五至平
年陳の代五至三十年隋の代三至五年唐の太家皇帝の貞觀十
九年日本人聖天子代孝德天皇の大化元年に即位り蜀と云
大化より五百三十年の昔アリム大化元年より文明までと云ふ
九百年にも近かる蜀アリカミテ蜀に之錦と之六千二百幅年の古物
アリ倚アリシトカミテこの正統上総の笠置山親王勅授の御文書を閑の
東の諸侯の内室主種々の佛像を奉納ありて宝瓶に備セナリ各々信者の
功徳賞せしも元と義ひて其中に山内官領の奥方より人送づる錦の
御戸帳と云ふと第アリのやまとありと風聞あまうきりと大通鑑
合巻の錦にまこと君の金富花の方もこゑにまきて一縷底のとある
あらはにまこと一縷底の武家の宝アリ合巻の奥方ありと賞せ



有るがての附添一人の女ちくにすら梅鼻あめに毒氣を押すと
ヨレサク聖慈やうんをださりてすまぬもと禰ふらままでまつて來
トガトもく看ゆやア丸びづこよ下也ア吉浦金曾木南と西の方角遠
辻駕渡を渠一も居ゆうこちらの處が不樂内を知らずか未だ立ト
梅が多きにほれどもがむかひて坐かねどもあらうト一筆
きまが付よドレセんきびこの互へがくと禮とまくせやう今テコレマアよくは
カヨ其構も渾身の通ぐ歎の四方あれ無事を慶へ連席ヘヘキ
モモヘ篇の、時の拜殿もとをゆくとせりとまくの事やお出更姫
モモヘ篇の考究せりわはは業をもとがうる姫のあらわ
えと候もあらゆり四十あうノアノアヒンギ「誠」やばくあ美、味もる仕業候
人びきあひと鳥くは組、持縫の智あく山方、織川姫とあり上はる
があらう其妙、甚る使なりと覽てもが懐の念まく始萬代付かうと
今まく漫言縫ぐ途申被合あうニキトナハ芳木、「少一漏代が
まき」ひも、ひもくさん、ひもくさん、ひもくさん、ひもくさん、
邊くふう、無慈悲からう持て毛利純をまくに仕事ともも佛
業も、ひもくさん、ひもくさん、ひもくさん、ひもくさん、
生金錢よとひく姫波とう思案一も看くどもすも務めの方と返す
ざあナア持組毛トヤアどうう強後すまく、「せまがサキのひまに
ゆみて、えみ
損みがゆのことを、安目と妻も歯せつドレ一ぱくすモベント本の根に
風とえナ魚も寄る者人の文京忙生をも彼女もまく着もうけしが

物うとうふうのまきく サ「うるわづへ 輪あがれどもぐる元氣とをもと
ううとせねりてはまく ま方達も事は裁せやうそうとすらや
うあくまく迷まゐるにものよがゆいのんでかせきの出所も源一とゆる
相模と プラットモ前史契をひきの機縫に多摩生と姉の齋も
ゆるとも先刻の義を知るおれ やマナニ吉原の ハテ姉の義を張
さん始とひく神宮原のアッセムの神も御山田少佐も遠室
トキハタカハシア室よもうサア引却く 樹がばどうどナ生垣柳
始あるつけず左格レーベア急カト大粗不歎をもく こゑのものとあら
トま ゆりんす やと あらむ
湯が浦幸郷の辺りに徘徊 トキハタカハシア室よもうどナ生垣柳
をも きりもの
め者うりかる兩個の破落戸的に右左うく 轮あくま 一 ハテうち坐
や うち もうらう こさもひ こ も
風の裏内よ梅を尋ねると小奇羅あ若鹿ひめのしかみが在りけりまとあまが
きし
馳むくまをまうらんご邊の「途りうく居宿」とく筋すじも筋すじの跡あと
や ひまと う
せき息ひで著するが通のまきくに仰起引よきまく筋すじえ
あまくま あまくま
多朝夕往來をその執事とぞうよく何を就とりの掛やすが
ゆ
業つゝゆる室中とこのくに自己の判人くわんじんが婦女の美羅みらのあゆきが大穢おほ
和方わがたが食ふ事の通りにゆるもうと風とまが村むらのあめまき
かまくらとう でき まくら まくら
このねみ晴雨はれがひまくら縁えん上別べつス和わが尾お非ひ核かくましと見み出だそ

書院へやくと酒肴がさすも純利の酒へ、玉露を口にさし
さううえまうづつて、酒肴がさすも純利の酒へ、「アラ、
指組意程ひよト魚茶お味が彼が強く純利と多く兩個が並
わづか一あ
か近付の薦をめさせへ、「アラトアモ」遠慮めり越サア指組ト
あづかとあらん とり
ふぶがとくわく「ヨルヒテ奉る純利とテアレサヘ、」「ライ萬代大富が納
子 まど あらも か ト
藝ト恩ナ 上戸の藝ハガちの名の字のまのまのホウツト純利をさ
あらびまく採むづ、二六がきをあらまく画毛アリ、「アラト」一声七轉
あらわら まか
八剣舞はアリヘマヌーザ、「コレハトヤドロクミハモ眼張アキマ
さき こくう
纏より綾るが如き生ぬるが腕をまわにはりテ虚室處にうむそ
あ うて
割キアラジナシ酒ノアラシハ仇強藝アラモダクタ何の三割酒
か か か
芋や、「ほんとおせりお酒へ、酒は玉網アラシ酒ヨ今アドアリ
と波多江さんとお酒アラシ酒アラシ酒ヨ今アドアリ
を矣 えんや
やうか仕合せと今取のやくにまつてアラシト高美の纏をも
まきれそろーけを

貞操婦女八賢誌二編中一



さき山のつましもの
楊太真遺傳

精製桐の箱入

七
處
女
子

一
百
二
十
文

所弘賣

只自古と稱のどくあり二里り則ひより
御移ふ荒庵の机同も
相二事のとれまほすとるまのとくじ。ゆゑび。そばを。持れ
の名。あとのれよしも源りくはくとくと徳食。かれて教
法ひこの玉枕多めきりぬあらゆも白粉と付く粉うもきり
自ら素の身くわいに拂はれり罪む方じるま不及奉達。は方が
用ひしも因に主じて莫く見る案法ゆゑ法經ひき詮用ひ持され
真の義人とすりゆべ

為永春水精初

書物并繪入讀本所

江戸京橋弥左門町東側中
文永堂 大嶋屋傳

堂 大嶋屋傳右衛門

腰の筋と
盤據とも
妙案、初めざ
ま室

あくまうへ婆と渡りだる
ありよみうじくき
うのうす 代三十六文

